

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 19 日現在

機関番号：12101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370890

研究課題名(和文)古墳時代の村落領域と階層構成の実態 東関東における量的把握の実践

研究課題名(英文)Research of the village area and hierarchical composition in the Kofun period - Quantitative analysis in East Kanto-

研究代表者

田中 裕 (TANAKA, Yutaka)

茨城大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：00451667

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、国家形成期における階層構成の実態と、その基礎となる村落の基礎的・伝統的領域について東関東の資料から分析しようとするものである。分析の対象として、茨城県中央部において戦略的に古墳の調査・整理・分析を実施した。分析対象は小美玉市羽黒古墳群、水戸市愛宕山古墳、ひたちなか市三ツ塚古墳群、城里町徳化原古墳とした。研究の結果、古墳時代の間に起きた変化は流通の変化と密接に関係すること、そして7世紀における行政区画の再編成が、古墳からも分かる可能性が認められたことは、大きな成果であった。調査成果は報告書として公刊した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to analyze the actual condition of the hierarchical composition at the time of national formation and the basic and traditional domains of the village which is the foundation from the data of eastern Kanto. As a target of analysis, we conducted a survey of key tumuli in the central part of Ibaraki Prefecture. Specifically, it is survey of Haguro Kofun group in Omitama city, survey and organizing work of Atagoyama Kofun in Mito city, survey of Mitsuzuka Kofun group in Hitachinaka city, survey of Tokkebara Kofun in Shirosato town was conducted. As a result of the research, it was confirmed that the change occurring during the Kofun period closely relates to the change of distribution, and that the reorganization of the administrative division in the 7th century influenced the tumulus. The results of the survey were published as a report.

研究分野：考古学

キーワード：古墳 領域 地方行政区画 愛宕山古墳 羽黒古墳 徳化原古墳 三ツ塚古墳群 流通

1. 研究開始当初の背景

古墳時代の階層構成の実態を把握する、古墳時代村落の基礎的・伝統的な領域(広さ)を把握する、この2点は、それぞれが古墳時代研究の鍵を握る課題である。同時に取り組みれば、村落単位で古墳が築かれる場合と、村落を超えて築かれる場合を峻別するなどの分析を通じて、村落間の組織化の状況や、村落群を形成する集団の特徴などを明らかにできるようになり、地域社会のまとまりかた(分節構造など)を実態に即して解明できる、と考えている。

これらの課題を達成するには、古墳や集落の質的な把握とともに、量的な把握も必要であり、本研究を計画した。ただし、質的・量的把握を両立するには、実現性の観点から、地域を絞り、集中的に把握に努めることが現実的である。前方後円墳の把握が比較的進んでいる前期古墳に対し、古墳数が極めて多い後期古墳というように、地域の中でも時期ごとにデータの質や量に違いがある。とくに、中期古墳は時期比定が簡単ではなく、把握されている数も少ないという背景があり、資料的空白をよく吟味するために、古墳の戦略的な調査が必要であった。

2. 研究の目的

私どもは以前に『常陸国那賀郡家周辺遺跡の研究』(田中ほか 2014)を実施しており、那賀郡家:茨城県水戸市市渡里官衙遺跡群に関して、まず地名調査によって官衙と古代道及び駅家の位置関係を復原し、発掘調査によって7世紀の堀囲施設(居館または評家遺構)の存在を明らかにするとともに、測量調査によって那賀国造墓の第一候補(郡家から最短距離にある最後の前方後円墳)を把握した。これにより、古墳時代から奈良時代にかけての歴史的経緯を景観として可視的に描くことが展望できたと考えている。この研究を行った地域について、さらに継続的な調査を加えることで、質・量ともにデータを充実させることができ、研究を進展させながら、地域社会の基礎的・伝統的な領域とその変化の実態、及び変化の要因について、解明する手がかりが得られると考えた。

3. 研究の方法

今回は、東関東の那賀でも那賀郡及びその周辺を中心とした茨城県中部の古墳を対象に、とくに鍵となる資料について戦略的に踏査や測量、整理・分析を行った。上記の目的を達するには、中期に関する資料の十分な評価が必要であることから、中期古墳の把握を第一とし、かつ、各時期の基準となる資料について調査を実施した。また、終末期においては、『常陸国風土記』建評記事に関わる古墳をあぶり出すことで、令制移行に伴う地方行政区画の再編成と、地域結合体の領域について、村落立地を含めたミクロな分析が可能

になることから、のちの郡家所在地より離れた地域の首長墓に狙いを定め、実態解明を行った。なお、分析の前提として、古墳と集落とを総合的かつ広域的に比較しながら分析できるよう、土器編年の整備についても、地域の研究者の協力の下、共通理解の得られる物差しの作成が必要であった。これについては、茨城県内の古式土師器編年について、共通理解の醸成ができた(谷仲ほか 2016)。

4. 研究成果

(1) 羽黒古墳

茨城県小美玉市羽黒古墳は、近年器台形埴輪・壺形埴輪が報告されて、注目されている前期古墳である。那珂川流域と霞ヶ浦流域との結節点に位置する。1973年以降、測量調査がなかったことから、より詳しく古墳の墳丘形状を調査することにより、首長間の結合関係等を詳細に分析することができると見込まれた。なお、南に隣接する羽黒2号墳(円墳、径21m)についても、ともに測量調査を実施した。

羽黒古墳は比較的高くて広がる前方部をもつ、二段(または後円部三段)築成の前方後円墳(墳丘長約70m)とみられた。後円部径:前方部長比は、現況で約3:2である。この数値は久慈川流域の梵天山古墳や星神社古墳にみられる4:3と異なり、同様に長い前方部をもつ王塚古墳を除く、茨城県の桜川水系の前方後円墳にみられる比率(芦間山古墳や田宿天神塚古墳等)に近い。後円部西側の陸橋状施設も田宿天神塚古墳と共通する。前期古墳の段築は、茨城県域で存在が指摘されているものの明瞭とはいえない例が多く、確実な例では前期末~中期初頭の大洗町日下ヶ塚(鏡塚)古墳がある。

埴輪については以下の点を確認した。

- 羽黒古墳には器台形埴輪と壺形埴輪が共存する
 - 器台形埴輪と壺形埴輪は組み合わない
 - 羽黒古墳前方部付近には棒状浮文を有する大型壺も存在した
 - 羽黒古墳の北に隣接する高まり(4号墳)の周辺で、器台形埴輪等が多く採集される
- d)については、4号墳遺物に、白色砂粒の多いザラザラした胎土、内外面・破断面ともに赤色化した脆い焼成などの特徴をもつ厚手の個体と、内外面とも明るく発色する薄手の器台形埴輪があり、羽黒古墳(1号墳)の他の採集遺物とは質が異なる。羽黒古墳の周辺には、器台形埴輪を有する小規模古墳が、1基ならず、存在した可能性が高い。

羽黒古墳の築造時期は、前期後半(4世紀後半)とみられる。茨城県域では、前期の前方後円(方)墳が、比較的均等に、満遍なく分布しているが、中期以降は偏在化する。これは時期的な特徴である。

古墳時代前期は、馬などの大型家畜を欠く。鉄器が普及した弥生時代後期からは、極端に水上交通へ依存する社会である。わずかな分

水嶺が交通を妨げ、文化的障壁になる。そんな社会では、流れが緩やかで、細く長い「中河川」流域等で、濃密なネットワークをもつ地域結合体が形成される一方（田中・日高1996）、鉄などの必需品を外部に依存するため長距離交通の保証が社会的課題となる。

茨城県域は、地形的にも那珂川・久慈川水系以北の県北域と、霞ヶ浦と水系でつながる県南域では、異なる地域と認識されている。その理由は、両者は水系でつながっておらず、海路でも、銚子沖の難所により分断されていることが歴史的に影響してきたと考える。

水上交通に極端に依存した長距離交通は、「最大水路・最小陸路」の原則で理解できる（TANAKA 2017）。このとき、霞ヶ浦の高浜入りに流入する園部川と、北浦の北端に流入する巴川が、南北交通の鍵を握る。とりわけ、霞ヶ浦から園部川を遡上し、わずかな陸越えで巴川上流域・涸沼川上流域に接続するルートは、最短の理想的水上交通路である。

羽黒古墳は、前方後円墳が集中する霞ヶ浦沿岸から離れた孤立感のある前方後円墳であるが、前期に特有の社会状況を反映した古墳である。異系統の長頸壺形埴輪と器台形埴輪が集まり、小型古墳まで配列されるのは、異なる水系を結ぶ結節点の選択肢に限られるため、同一地点に複数のネットワークが相乗りし、交錯していることを示すと考える。すなわち、水上交通にとくに依存する前期社会にとって、理想的で必須の交通路を押さえ、陸越えや荷揚げ等の実務を掌握することで、長距離交通の直接的担い手を管掌する集団の存在が浮かび上がる。

（2）愛宕山古墳

最大の課題である中期古墳の把握を目的として実施したのが、茨城県水戸市愛宕山古墳の踏査及び墳丘測量調査である。

同古墳は、茨城県域でも墳丘規模において石岡市舟塚山古墳と並立する中期古墳である。明治大学の測量調査以降、詳細な調査が行われてこなかったが、採集埴輪の紹介を通じて少しずつ解明が進んできており、さらなる詳細調査が待ち望まれていた。

私どもは、従前より機会を捉えて断続的に踏査・測量調査を行い、資料を蓄積してきたが、中期古墳のもう一つの基準資料となるべき石岡市舟塚山古墳の測量調査にも、明治大学と合同調査で参加する機会が得られたため、同時に愛宕山古墳の詳細解明を進めることにより、茨城県域における古墳研究を大いに進展できると確信したため、蓄積資料の整理・分析作業を進めることとし、今回、成果を公にすることができた。

その結果、茨城県南最大の中期古墳である舟塚山古墳（墳丘長 186m）が、大枠では大阪府百舌鳥古墳群（または奈良県馬見古墳群）系統の墳丘であるのに対し、県北最大の中期古墳である愛宕山古墳（墳丘長 140m）が、大阪府古市古墳群（または奈良県佐紀盾列古墳群）系統の墳丘といえること、つまり、

県域の南北で異なる系統の古墳がそれぞれの頂点に位置することが鮮明になった。ただし、愛宕山古墳は二段もしくは低基段をもつ見かけ三段築成の前方後円墳であり、思いのほかくびれの強い前方部をもつため、形が完全に一致する古墳は即座に見いだしにくい。このような太く短い前方部をもつ中期の前方後円墳は茨城県域にはほかになく、周辺各県域の最大クラス古墳では、群馬県域（太田天神山古墳・お富士山古墳など）に見られる一方、隣県の千葉県域では百舌鳥古墳群系統ばかりであり、栃木県塚山古墳も同様であるため、その分布には偏りがあることを指摘できた。

愛宕山古墳と舟塚山古墳の埴輪を比較すると、ともに黒斑を有し、窯焼成の個体が見当たらず、比較的近い時期の所産であることも再確認した。一方で、舟塚山古墳では全体形・突帯形状・ハケ調整ともに、統一的で均整な埴輪であるが、愛宕山古墳では全体形、突帯、調整、透し孔（方形、円形、小円形）、線刻の有無等、際だって多様性が認められた。

愛宕山古墳の所在する那珂川周辺の中期前方後円墳には、斜格子タタキ目をもつ埴輪をもつ東海村村松権現山古墳、B種ヨコハケを含む窯焼成埴輪をもつひたちなか市川子塚古墳がある。愛宕山古墳はこれらより古相であるが、系列的に理解できる手掛かりについて、以下のように分析した。

一般的な埴輪では見られないものの、愛宕山古墳の埴輪には多く見られる、ハケのほか板ナデ主体のナデを多用する埴輪、太く変形した突帯、湾曲の激しい形状、段の高さに比して小さい透し孔、朝顔形埴輪肩部の斜格子状線刻の5つの特徴に注目すると、これらをすべて共有する例がある。長野県土口將軍塚古墳の埴輪である。格子状タタキが著名であるが、ハケの埴輪もあり、さらに～の特徴をもつ埴輪がすべて揃っている。とくに、朝顔形埴輪の肩部に施された斜格子状線刻は特徴的である。竪穴式石室出土の鉄鏃と短甲片から5世紀前葉の築造と考えられている。土口將軍塚古墳埴輪の～の特徴は、長野県域南部の主要古墳に継承されたと考えており、決して単発的で異色の埴輪ではない。

目を転じ、ナデを多用する埴輪を探すと、中期前葉の大型帆立貝形古墳である埼玉県東松山市雷電山古墳に、突帯形状が独特ではあるものの、～の特徴が集まる埴輪がみられる。埼玉県北部には、格子状タタキの埴輪をもつ中期大型円墳の本庄市公卿塚古墳・金鑽神社古墳・生野山將軍塚古墳が集中している。

こうした長野県や埼玉県の例に接すると、茨城県で東海村村松権現山古墳にタタキの埴輪がある点も、愛宕山古墳との関係性が注目されてくる。タタキとの親和性がある～

の特徴を備えた、ナデ多様埴輪を含む愛宕山古墳が、こうした中期前葉の広域的なネッ

トワークを体現している可能性がみえる。斜格子状線刻をもつ朝顔形埴輪の存在が確かであれば、その可能性はむしろ高い。

以上を総合すると、古墳時代中期前葉（5世紀前葉ごろ）は、墳丘形状も埴輪も系統の異なる大型古墳が、茨城県域の南北に、分立していたことになる。県南域には舟塚山古墳を中心に、霞ヶ浦 香取海水系を通じ水上交通を介してつながる極端な広域結合体が形成されたと考えており、愛宕山古墳を核とする県北域も、不鮮明ながら、同様に考えられる。愛宕山古墳の立地は、伝統性を主張しにくく、前期の安戸星古墳等から基盤を引き継いだというより、のちの東海道駅路渡河点に近い事実からみて、陸上交通の台頭に伴う交通路の変化を体現した、政治的選択の反映とも読み取れる。すなわち、茨城県沖の海上交通路に対し、陸路運搬技術の進展（馬などの登場）によって、陸路（と河川交通を両立させるルート）が台頭し、水系で分断された県北域をつなぐ鉤となった可能性である。中期のこうした変化は全国的にも重要であり、領域の固定的な捉え方には疑問が生じる。

（3）三ツ塚古墳群

最大の課題である中期古墳の把握について、新たに確認された中期の大型古墳について、墳丘測量調査を行った。ひたちなか市三ツ塚第13号墳である。

ひたちなか市は、装飾古墳として著名な虎塚古墳をはじめ、6～7世紀（古墳時代後期・終末期）の遺跡が、古代律令国家の成立と絡めて、全国的に注目されてきた。一方、それらに先立つ5世紀の古墳は把握が十分に進んでいなかった。同市の川子塚古墳は、墳丘長80mの前方後円墳で、茨城県内有数の中期古墳であるが、虎塚古墳等から離れた臨海部に位置して唐突感があり、前後のつながりを説明できていなかったのである。

5世紀（古墳時代中期）は、石岡市舟塚山古墳や水戸市愛宕山古墳のように近畿の巨大古墳に匹敵する大規模古墳がある一方、この時期だけ途切れているなど、確認される古墳や集落遺跡が少ないため、大型古墳が一つ確認されるだけで、当該期の階層構成や領域の理解が大きく変わってしまうのである。

三ツ塚古墳群は海に面する崖部に位置するその特徴的な立地から、「海浜型前方後円墳」との関係が注目され、特色ある集団を象徴している可能性も、領域研究には大いに影響する。

調査の結果、三ツ塚古墳群は中期前葉から始まった継続性の高い海浜部の古墳群であることが判明した。最大の第13号墳は帆立貝形古墳（墳丘長約68m）であり、次に大きい第12号墳がこれに先行するか同時期の円墳（径51m）である。

第12号墳に典型的な「筒状壺形埴輪」は、ナデ消しが多用されるとはいえ愛宕山古墳の埴輪とはまったく異なり、大洗町日下ヶ塚（常陸鏡塚）古墳と共通性がある。第13号

墳で採集された「筒状壺形埴輪」も同様とみられる。ひたちなか市の海浜部には、大洗町の涸沼川下流域から基盤を受け継いだ集団が展開した可能性が高い。なお、第14号墳は形象埴輪を有する後期古墳であり、当古墳群の継続性をものがる。

大洗町の涸沼川下流は、内水面と外洋の結節点であり、「最大水路・最小陸路」時代の水上交通では、県南域と県北域をつなぐ、ほぼ唯一的なポジションを有する。

ところが、三ツ塚古墳群の築造開始は、愛宕山古墳の築造と同じ中期前葉（5世紀前葉ごろ）とみられ、このころ大洗車塚古墳は大型とはいえ円墳である。涸沼川下流域の唯一的ポジションに変化が生じた可能性もある。理由は既述のとおり、陸路（と河川交通の両立）の台頭と考えている。近しい地域で競争的交通路が複数生じたとなると、事態は複雑化する。陸路の台頭に対し、水界民たる涸沼川・那珂川河口の集団は、海路保持に力を注いだかもしれない。

中期後半には、ひたちなか市海浜部にも前方後円墳の川子塚古墳が築かれる。B種ヨコ八ケを含む均整な埴輪には、愛宕山古墳との有機的關係が見えない。愛宕山古墳の優位性を認めながらも、前期から引き継いだ立ち位置を変化させつつ、海上交通にこそ、新たな役割を見いだした集団が想像される。

なお、三ツ塚古墳群の北部に連なる磯崎東古墳群は、三ツ塚古墳群造営を契機に展開する群集墳とみられ、海での実動部隊を彷彿とさせる古墳群である。質的に内陸部の古墳と大きく異なるため、量的分析に課題が残った。

（4）徳化原古墳

東茨城郡城里町徳（頓）化原古墳は、町指定文化財であり、那賀郡中枢域から離れ、前方後円墳などの主要古墳が周囲に分布しない地区に単基で存在する、大型終末期古墳である。同地区は令制下の国郡里制における阿波（粟、禾）里に相当しており、那賀評内における7世紀の集団編成、とりわけ古墳時代の国造制、評制、そして奈良時代の国郡里制移行に伴う地域集団の再編成に際し、その推移を分析する上で、階層構成や領域研究にとっては格好の素材と考えた。

1985年の墳丘及び石室測量調査等により、墳丘について前方後円墳ないし方墳の可能性が指摘されているものの、周溝部形状を含めた把握までに至らなかった。石室については2011年の東日本大震災により破損し、城里町が緊急の修復・補強措置をとったことから状況が異なっており、破損状況を含めて現況の把握が必要となった。

調査の結果は以下の通りである。真北に正確な主軸をもつ長方墳（東西28m、南北21m以上）であり、中央に横穴式石室を配して南面する。石室奥壁から等距離（14m）の位置に墳丘裾の各辺を配するなど、正確な測量に基づいている。周溝は斜面の高い側のみ掘削し、低い側は削り出し整形とみられる。

石室は地元の凝灰岩を切り出して組み合わせた、単室構造の凝灰岩切石組石棺式石室（現長 3.5m）である。形状は栃木県域に類例をもつ。地山を掘り窪めて横穴式石室を置く半地下式構造は、茨城県域にほぼ共通する。玄室は縦長であるが、奥壁などが正方形を基本とする形状は、7 世紀中葉以降の所産とされる。古くより開口し、徳化の名称から想像されるように、中世以降、石室が仏教施設等に利用・再加工された可能性がある。羨道両側壁の刻みはその際の痕跡とみられる。

山上憶良の『貧窮問答歌』（『万葉集』巻五）は奈良時代の公民の窮乏ぶりを伝える歌としてよく知られるが、歌中に登場する「里長（五十戸長＝さとおさ）」の姿については、古代史も考古学も、十分に描けているとはいえない。里は、大宝令（701 年）で定められた国郡里制に基づいて郡の中に置かれた行政単位である。もとは孝徳朝（645-654 年）以降に置かれたとみられる五十戸で、郷里制（715 年）で郷に改称され、郷制（740 年ごろ）に移行した。すなわち、徳化原古墳が築かれた 7 世紀中葉～後葉は、郡の前身である評と、その中に里の前身である五十戸が置かれた時期とみられているのである。

徳化原古墳周辺は主要な前方後円墳が分布せず、比較的群集墳が発達する地区である。その状況下、現状では単基で存在する墳丘長 28m の本古墳は、同時期の終末期古墳と比較すると、つくば市平沢 1 号墳と同規模であり、墳丘形状（長方墳）もよく類似する。平沢 1 号墳は筑波国造墓の第 1 候補とも目されるもので、この時期の長さ 30m 前後の方墳は、各地区における代表的な首長墓である。

徳化原古墳の所在地はのちの那賀郡域に当たるが、郡家からは遠く、主要な古墳群からも離れている。位置関係からは、那賀国造や、のちの郡司層との関係を読み取ることはできない。このような場所に代表的な首長墓が、やや唐突感を伴って築造された点、そして築造時期が、五十戸設置の時期に該当する点には、注目せざるを得ない。

古墳のある北方台地の眼下には、『和名抄』記載の「阿波郷」に通じる阿波山や粟の地名が残る。7 世紀には、五十戸編成の舞台の一つになったと考える。周辺に蕨手刀を出土する終末期群集墳が卓越するこの地区のなかで、徳化原古墳は特別な存在である。五十戸が編成された際の、最初の里（五十戸）長が造営したものとしても矛盾はない。

この想定が妥当ならば、実態がわからない里長や郷長に相当するものがどのような存在であったか、評制移行時の地域の実態を踏まえ、考古学的に考える手がかりをつかんだことになる。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

TANAKA, Yutaka, Progress in Land Transportation System as a Factor of the State Formation in Japan, *JAPANESE JOURNAL OF ARCHAEOLOGY* 5/1, The Japanese Archaeological Association, 査読有、2017、26-43

田中裕、久慈郡にみる 4・5 世紀の世界、東国古代遺跡研究会第 7 回研究大会茨城大会「『常陸国風土記』の世界 - 古代社会の形成 -」、東国古代遺跡研究会、査読無、2017、1-18.

田中裕・一之瀬敬一、ひたちなか市平磯町三ツ 13 号墳の測量調査、ひたちなか埋文だより 43、査読無、ひたちなか市埋蔵文化財センター、2015、5-8

〔学会発表〕（計 3 件）

田中裕、古墳と「常陸国風土記」、鹿嶋市文化スポーツ振興事業団歴史講演会、招待、2017

田中裕・栗原悠、茨城県域における豪族の動向、第 12 回茨城大学人文学部地域史シンポジウム、2017

田中裕、古墳時代地域結合体の動態と『常陸国風土記』建評記事 那賀国を中心に、島根県古代文化センターテーマ研究事業検討会、招待、2016

〔図書〕（計 1 件）

田中裕・大里美穂・一之瀬敬一・栗原悠・稲田健一、科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書【2014-2017】茨城県中央部の古墳調査 古墳時代の村落領域と階層構成の実態（東日本における量的把握の実践）/研究代表田中裕、茨城大学人文社会科学部考古学研究室、2018、全 91

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田中 裕 (TANAKA, Yutaka)
茨城大学・人文社会科学部・教授
研究者番号：00451667

(2) 連携研究者

亀井 宏行 (KAMEI, Hiroyuki)
東京工業大学・情報理工学系・教授
研究者番号：60143658

佐々木 憲一 (SASAKI, Ken'ichi)
明治大学・文学部・教授
研究者番号：20318661

吉澤 悟 (YOSHIZAWA, Satoru)
奈良国立博物館・列品室長
研究者番号：50393369